

IUFR0-J NEWS

No. 133 (2023.1) —

IUFR0 全ディビジョン会合参加報告

東京大学大学院 農学生命科学研究科 香坂 玲

IUFR0 の全ディビジョン会合が、9月21日から23日の日程でウィーン応用美術大学にて開催された。日程は拡大運営幹事会の直後というタイミングであった。ハイブリッド開催となり、対面では先着約250名の参加受付であった。筆者は対面でオーストリア・ウィーンでの会合に参加した。

会合は全体テーマが、「激動の世界にある森林—森林を持続させ、社会的便益のために必要なグローバルな協調」(Forests in a Volatile World — Global Collaboration to Sustain Forests and Their Societal Benefits)とされ、2つの基調講演と6つの部会から構成された。

初日(9月21日)はエクスカーションで、「森林と水」が一つの部会の題材となっていることもあり、ウィーンの水源の森、Steinfeld エリアの農地近くの防風林、森林火災の跡地などを視察した。森林火災については、現在でも第二次世界大戦の弾薬の残りなどがその原因となることもあることなども紹介された。

二日目(9月22日)には二つの基調講演と各部会からの全体発表の後に、各部会に分かれて部会の議論がなされ、最終日の三日目の午後に各部会から報告と意見交換がなされた。

6つの部会のテーマは、「森林と人間の健康—ワンヘルスの視点から」「バイオエコノミー」「森林の劣化と再生」「ジェンダー平等・不平等とIUFR0のネットワーク」「将来のレジリエントな森のための森林遺伝資源」「森林と水」となっていた。

2つの基調講演のうち、最初の発表はフライブルク大学の森林・環境政策の Daniela Kleinschmit 教授によるものであった。その内容は1992年のリオのサミットにまで遡り、森林に対する社会からの要請が多様化し、かつ増大している点が指摘された。気候、経済成長に関わる議論に加え、森林に対する社会的な要請についても見落としてはいけないとのコメントがなされた。質疑において、筆者から地球規模で植林自然再生について生物多様性に関する質問を出したが、(欧州の森林戦略にあるような)「植林の本数」はあまり戦略的ではない目標であるとの回答がなされた。

2つ目の基調講演は、国際応用システム分析研究所(IIASA)の Florian Kraxner 博士による講演であった(なお同氏は北海道大学で博士号を取得している)。前段で素材生産に対する要求が高まる一方で、気候変動に関する要望も森林に対しては高まっている現状があると指摘した。その際、サイエンス誌の Anderegg ら(2022)を引用する形で、気候変動により森林が直面するグローバルなリスクを指摘したうえで、気候変動による樹種の適性がどのように変わるのかを Google Earth Engine を活用した視覚化のプロセスを使って発表した。そのうえで、脱炭素だけではなく、陸域の生物多様性の重要なエリアを考えるうえでは、「水」、「生物多様性」、「気候変動」の3つを見ないといけないという点を、Jung ら(2021)を引用する形で説明した。

基調講演、部会などに共通して、気候変動の影響下で



写真-1 エクスカーションでは水源・森林火災の跡地を視察 (IUFRO John Parrotta 会長と)



写真-2 ウィーン天然資源及び応用生命科学大学の研究者と交流 (造林学分野の Hubert Hasenauer 教授と)

森林の成長と生産性のポテンシャルを踏まえることの必要性、また生物など物理的な影響と合わせて、社会的な要請と影響の重要性についての指摘がなされた。その際に、ジェンダー、発展途上国、地域や先住民への配慮と参画が欠かせない点についても繰り返し指摘がなされた。

関連リンク

Presentations

<https://www.iufro.org/events/all-iufro-conference-2022/programme/>

Book of abstracts

<https://www.iufro.org/fileadmin/material/publications/>



写真-3 農地に隣接する林地の防風・土壌保全の機能等の解説

[proceedings-archive/all-iufro-conference-2022-abstracts.pdf](https://www.iufro.org/fileadmin/material/publications/proceedings-archive/all-iufro-conference-2022-abstracts.pdf)

Photos

<https://www.facebook.com/media/set/?set=a.505878274912976&type=3>

Videos

- Moments of the Conference <https://youtu.be/VC7immr2XAk>
- Excursion highlights https://youtu.be/9__d93iVrGY

Keynote speeches by:

- Dr. Daniela Kleinschmit <https://youtu.be/pxxe98glaWY>
- Dr. Florian Kraxner <https://youtu.be/7ANjkhyAtjk>

Sessions:

- Forests and Human Health – A One Health Perspective <https://youtu.be/jXZRds-eDDE>
- A Forest-based Bioeconomy <https://youtu.be/jALRH0KqpGk>
- Forest Degradation and Restoration <https://youtu.be/WeZaeMmlk4Y>
- Gender (un-)Equal Networking of IUFRO <https://youtu.be/nEjRmfbTxPw>
- Forest Genetic Resources for Future Resilient Forests <https://youtu.be/e7glynGEEBY>
- Forests and Water <https://youtu.be/Cu2lXzRiOms>

#引用#

ANDEREGG, W.R. L. et al. A climate risk analysis of Earth's forests in the 21st century
Science DOI: 10.1126/science.abp9723

Jung, M., Arnell, A., de Lamo, X. et al. Areas of global importance for conserving terrestrial biodiversity, carbon and water. *Nat Ecol Evol* 5, 1499–1509 (2021). <https://doi.org/10.1038/s41559-021-01528-7>

「IUFRO OKINAWA 2022: Progress in Small-scale Forestry beyond the Pandemic and Global Climate Change」の開催報告

兵庫県立大学地域創造機構 前田千春

1. はじめに

IUFRO3.08.00 小規模林業分科会の国際研究会を9.06.00 森林法・環境法分科会の協力を得て2022年10月26日～31日に沖縄県宜野湾市の沖縄コンベンションセンターにおいて開催した。小規模林業グループの研究会は1997年の京都、2013年の福岡での開催に次いで国内では3回目、森林法・環境法グループは日本初の開催であった。共通テーマを“Progress in Small-scale Forestry beyond the Pandemic and Global Climate Change”とし、コロナ禍を経験した諸外国と日本の森林研究の最前線を教えあい、世界遺産を含む貴重な天然林を有する沖縄からの情報発信を行い、今後の森林研究・教育・法制度整備の促進に寄与することを研究会の目的とした。

参加者数は研究会が76名（国内41名、海外35名）、公開シンポジウムの一般参加者が40名の計116名であった。報告数は基調講演2件、口頭発表36件、ポスター発表17件の計55件であった。

2. 研究発表およびエクスカージョン

研究会初日の午前中は基調講演、午後から2日目にかけては3会場に分かれて口頭発表を行った。2日目の午後にはポスター発表の時間を設けた。小規模林業を対象としたセッションでは、各国の小規模森林所有者の森林管理意向や経営課題、家族林業やコミュニティ林業に適応した政策や木材販売方法などが報告され活発な議論がなされた。森林法・環境法に関するセッションでは、持続可能な森林管理のための法的枠組みや木材の利用促進に向けた法整備などの報告があった。3日目はエクスカージョンで、漫湖水鳥・湿地センターのマングローブ林や世界文化遺産・斎場御嶽などを視察した。

3. 公開シンポジウム

研究会4日目に日英同時通訳付きで一般市民にも開放した公開シンポジウム「世界自然遺産やんばるの森林管理を考える」を開催した。第1部では、沖縄の森林史について仲間勇栄氏（琉球大学名誉教授）、やんばるにおける森林管理の現状について高嶋敦史氏（琉球大学）、



写真-1 研究会参加者の集合写真



写真-2 研究会初日の基調講演



写真-3 公開シンポジウムの様子

また、ヨーロッパの森林の保護と利用についてラスチラフ・シュレック氏（スロバキア・ズボレン工科大学）およびピーター・ヘルブスト氏（元オーストリア森林法務官）が講演を行った。その後、大田伊久雄氏（琉球大学）をコーディネーターとして、第2部のパネルディスカッションに移行した。ここでは、やんばるで森林と関わる業務や活動をされている3名（安藤祐樹氏、仲里貴正氏、上開地広美氏）にパネリストとしてご登壇いただいた。ディスカッションでは、やんばるが世界遺産に登録されたことのメリットとデメリット、バッファゾーンは木材の利用を含めた管理をしていくべきか、などについて、日欧の比較を通した多角的で興味深い討議が行われた。



写真-4 ポストカンファレンスツアー：国頭村森林組合にて

4. ポストカンファレンスツアー

10月30日～31日にポストカンファレンスツアーを実施し、沖縄島北部・やんばる地域を訪問した。やんばる学びの森でのネイチャーウォークでは多種多様な生きものたちが独自の生態系を成立させてきた亜熱帯の森を体感し、国頭村森林組合等の見学を通して木材利用の現状や木材の供給地として重要な役割を果たしてきた歴史についても学習した。研究会を通して好天に恵まれたが、最終日だけは大雨で急遽予定を変更して午後からは美ら海水族館を見学した。しかし、これが意外にも海外からの参加者には好評だった。

5. おわりに

2021年の春から研究会の実施に向けて動き出したものの、コロナ禍で海外からの参加者が入国できるのか等、様々な不安を抱えつつ準備を進めた。2022年3月末〆切の一次募集では発表申し込み数が30件に届かず心配したが、6月末〆切の二次募集では新たに50件を超える応募があり、開催に向けて弾みがついた。開催直前には入国制限も緩和され、結果として日本を含む20か国から76名の参加者を迎えて無事に開催できたことで、特に若手研究者にとっては貴重な経験と新たな出会いを得ることができたと感じている。

なお、本研究会を開催するにあたりIUFRO-Jからご支援をいただきました。IUFRO-Jならびにご協力をいただいた皆様にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

IUFRO Okinawa 2022 参加報告

早船真智

はじめに

2022年10月26～29日にかけて、IUFRO 3.08.00 Small-Scale Forestry Conference 2022 with the cooperation of 9.06.00 Forest Law and Environmental Legislationに参加してきました。本大会はコロナの影響で延期になっていましたが、大会運営委員会のご尽力もあり、沖縄コンベンションセンター（宜野湾市）にて対面で開催されました。なかなか情勢が読めない中、大会運営委員会のみなさまには国内外での調整および判断で多大なるご苦勞があったかと思いますが、貴重な機会をご準備くださったことに改めて感謝申し上げます。

研究発表セッション

26～27日の2日間でオープニングセッションおよびオーラル・ポスターセッションがおこなわれました。オープニングセッションではこれまでのSmall-Scale Forestry研究や日本の森林および小規模森林所有者・管理の概況についての報告があり、本大会の意義・重要性が確認されました。

2日間でオーラル36報告、ポスター17報告がなされ、Small-Scale Forestryらしい各国の多種多様な研究成果が発表されました。私の印象に残ったのは日本の入会や生産森林組合などの報告について、活発な質疑がなされていたことでした。各地域において歴史的に形成され、時代とともに変化してきた地域の森林と住民との関係の在り方は本大会参加者の興味を引くところであったと思われます。このテーマは日本語で聞いても本質的な理解は容易ではないところであり、各国各地域ですぐに活かされるものではないかもしれませんが、ある問題の解決の糸口として多様な森林管理の在り方を知ること、自身の持つ知識との共通点および差異を議論することの重要性を改めて認識させられました。

エクスカージョン・公開シンポジウム

28日の1 day Excursionと29日の公開シンポジウムでは、沖縄における森林の特徴と人間の関わりについて多くの学びが得られました。都市近郊のマングローブ林である漫湖水鳥・湿地センターと世界文化遺産である斎場



写真： オープニングセッション（左）、ポスター発表（右）の様子



写真： エクスカージョン（左）、公開シンポジウム（右）の様子

御嶽（せーふぁうたき）への現地訪問、世界自然遺産となった「やんばるの森」についての多様な立場の講演者（民間・行政・研究）の報告・ディスカッションを通じて、各々の立場の方々が何を守りたいのかを考えさせられました。

おわりに

本大会は3年ぶりに対面開催でおこなわれたことによ

り、海外の研究者はもちろんのこと、既知の国内研究者のみならずとも直接お会いするのは3年ぶりという方が多く、大会期間中の交流を通じて大変な刺激をいただきました。オンライン会議などの普及により空間を越えて交流できる機会も増えてきましたが、直接現地に足を運んでその土地の自然、文化を感じつつ、他愛ない会話も含めて人と交流する経験の大事さを感じられた4日間でした。

IUFRO Conference Division 7 – Forest Health, Pathology and Entomology Lisbon 6-9 September 2022 参加報告

森林総合研究所 東北支所 中村克典

はじめに

IUFRO Division 7 (Forest Health, 以下 Div.7) 全体での研究集会を開催しよう、という話が Div.7 のオンライン会議でとりあげられたのは、まだ新型コロナウイルス感染症が世界的にどのようなことになるのか想像もできなかった2020年夏のことであった。その後、国によっては感染対策が緩和されつつあった2021年夏になって大会の具体的な開催方法等の案内が届いたが、当時の日本はコロナ第5波の真っただ中で、とても周囲に参加を呼びかけられるような状況ではなかった（筆者だけでなく、国内関係者の皆さんの多くがそのように判断されたと思う。）。結果として、この大会の事前周知が国内に行き渡らなかったのは、残念であるが、致し方ないことでもあったと思っている。

大会の概要

大会は、2022年9月6～9日にポルトガルの首都リスボンでのオンサイトとオンラインのハイブリッドで行われた。会場参加者は190名程度であり、オンラインを含めた参加者は30カ国300人程度とアナウンスがあったような記憶がある。ただし、日本からの現地参加者は、折からのコロナ禍や前述の通り周知が行き渡らなかったことにより、筆者以外には東京大学の大学院生が2名だけと、かなり寂しいものだった。またここで特筆されるのは、中国本国からの現地参加者がいなかったことで、「ゼロコロナ政策」の徹底ぶりがうかがわれた。

4日間の開催期間の中に、4つの基調講演と26のセッ

ション（関連するポスターを含む）が配置され、2日目の午後には Field Trip、また最終日午後からオプションの Post-congress Tour が設定されていた。基調講演というと、その道の大家の先生の集大成的な講話のようなものになるのかと思いきや、総合防除（IPM）から総合的生態系管理（IEM）に向けた化学生態学的重要性を説いた Paiva 氏（ポルトガル）、養菌性キクイムシの世界における共生菌の役割についての興味深い研究テーマを提示した Biedermann 氏（ドイツ）、侵入害虫対策における研究者－行政－市民の協働の重要性を指摘した Pérez-Sierra 氏（イギリス）はいずれも中堅、もしくはむしろ若手のバリバリの現役研究者で、大会を各研究分野の活性化につなげようとする企画者の意向が伺える人選であった。大会最終日に基調講演された Wingfield 氏（南アフリカ）は長く Div.7 を先導された研究者であり、まさに大家と言える方だが、講演は森林保護分野の研究史を概観し課題を指摘しつつも、今後の研究の進展を明るく、強く後押しする内容で、会場全体が研究に対する意欲でおおわれるような印象であった。

セッションは口頭発表5～10題程度のものが多かったが、上限が定められていたわけではないので発表数が多いところもあり、例えばマツ材線虫病のセッションは口頭発表16題に加え関連ポスターが15題という大所帯であった。日本では低調になってしまっているマツ材線虫病研究が、海外では未だに盛んに行われていることが見てとれる。各セッションは個別の病害虫や生物的防除、侵入害虫のような特定の問題に焦点を絞ったもの



写真-1 口頭発表会場
講演者は主催者のひとりでもあるスイスの Brockerhoff 氏。



写真-2 大会2日目 Field Trip
5つのコースが用意されており、筆者は Valverde 国有林のマツ、コルクガシ造林地のツアーに参加した。

から、モデリング、方法論に関するもの、さらには「森林病虫害研究におけるジェンダー問題」といったもので、幅広い分野をカバーしたものだ。全容については、大会ホームページがまだ開設されているようなので (<https://iufro-lisbon2022.com/>)、そちらを参照されたい。

おわりに

一定程度緩和されたとは言え日本では新型コロナ水際対策がまだきびしかった頃で、現地で感染でもすれば帰

国できなくなる可能性もある中での緊張感のある出張となった。学会会場では各国の皆さんが普通に交流を楽しみ中、ほぼ常時マスク着用の筆者はさぞ異常に見えたことだと思う（ただし、会場を見渡せば数名は「マスク仲間」が存在した）。国ごとに基準が異なるのはやむを得ないが、基準の違いのために国際的な研究交流の場から取り残されていくようなことにならないよう、まだ当面はコロナ対策との妥協を図っていくことが必要なのだろう。

「5th International Conference on Radioecology & Environmental Radioactivity in 2022」への参加報告

森林総合研究所 きのこ・森林微生物研究領域 小松雅史

2022年9月4日から9日にノルウェーのオスロで開催された 5th ICER (International Conference on Radioecology & Environmental Radioactivity) に参加しました。ICER は3年に一度開催される環境放射能についての国際学会で、ノルウェーの放射線安全局 (DSA)、フランスの放射線防護・原子力安全研究所 (IRSN)、国際放射生態学連合 (IUR) の主催で行われています。当初は2021年に実施する予定でしたが、コロナ禍の影響で延期になったそうです。口頭発表はプレナリーセッションも含めると100件あまり、またポスターセッションも約50件と非常に多くの人々の参加で行われました。参加者は正確

に調べた訳ではありませんが、会場内には最大で250名程度いたのではないかと思います。発表は数名の録画プレゼンテーションを除きオンサイトで実施され、ほぼ全員がマスクをつけてはいませんでした（筆者も帰国前にコロナの陰性証明が不要となったこともあり、マスクをつけずに参加しましたが、幸い感染しませんでした）。

各発表は (1) Radionuclide speciation and ecosystem transfer, (2) Radioecology in decommissioning, waste management and disposal and management of nuclear and other legacies, (3) Risk characterization and assessment, (4) NORM (天然

の放射性物質), including technologically enhanced NORM from industry and radon, (5) Environmental protection, surveillance and risk management, (6) Radiobiological and multiple-stressor effects, (7) Emergency preparedness, rehabilitation and management の7つのカテゴリーに分かれて行われました。放射性物質の動態について扱う (1) が最も発表数が多く、口頭発表の3分の1を占めたほか、放射線防護に関わる (5) が次いで2割程度でした。

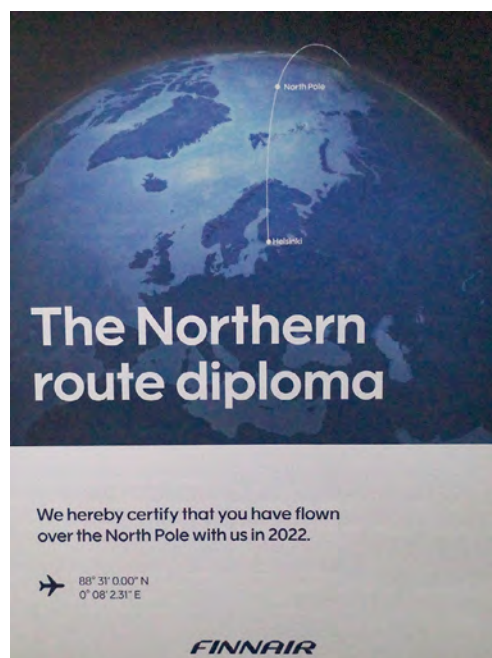
私も放射性物質の動態研究に関わる身として、(1) の発表を中心に、ベルギーのグループによる土壌特性と植物による放射性セシウムの吸収メカニズム研究や、フランスのグループによる福島でのモニタリングも含めた森林の放射性物質動態などについて、興味深く拝聴しました。フランスでは複数の研究所が連携して大規模なモデルを開発し、将来の潜在的な放射性物質の飛散イベントに対する各生態系への影響をモデリングしている点で感銘を受けました。他にもチョルノービリ原発周辺で空間線量率が上昇した現象について考察を行う発表などもありました。

私は野生きのこ・山菜の種や採取地点ごとの放射性セシウム濃度の特性についての発表を行い、質問ではきのこで野生動物の汚染の関係についての意見を求められました。近年野生動物への被爆影響は研究トピックとなっていることもあり、野生動物への関心が強いことを感じさせられました。なお、スウェーデンでは放射線量の高い地域へのイノシシの分布域拡大が問題となっている、という発表がありました。発表者ではありませんが、スウェーデンの参加者に話を伺ったところ、日本と同様にイノシシの個体数管理に苦慮している、ということでした。

今回、コロナ禍になって以来、海外・国内含めて初めての現地での学会参加となりました (ちなみにコロナ禍前の最後の学会参加はブラジルの IUFRO 大会でした)。昨今のコロナ禍の影響で web 開催の大会が増えておりますが、会場では共著者でもある友人と久しぶりに会うことができました。月並みですがやはり現地での参加はいいな、と思った次第です。また、ロシアによるウクライナ侵攻の直接的な影響として、移動時間の増加がありました。行きは北極回り、帰りはトルコ回りとなり、片



筆者発表時の写真 (撮影: 橋本昌司氏)



北極通過証明を航空会社よりいただきました

道の所要時間が5時間ほど増えました。また、大会は平時であったように見えたが、ウクライナの研究者が録画での発表となっていたことが非常に印象的でした。さらには今回初めてロストバゲージを経験しました。幸い私は1日で荷物がホテルに届けられましたが、同行した森林総研の橋本昌司さんは帰りのオスロ空港でなんとか荷物を見つけ出す、という状況でした。国際学会、海外出張に行かれる方も今後増えると思いますが、是非お気をつけください。

XXVI IUFRO World Congress 2024 開催の案内

XXVI IUFRO World Congress 2024 が 2024 年 6 月 23-29 日に開催されます。概要と Key dates は以下のとおりです。講演要旨の締め切りは 2023 年 6 月 2 日です。

ABOUT THE CONGRESS

The IUFRO World Congress is one of the largest global forest events, held every five years since 1893. The congress gives a unique opportunity to gather worldwide leading scientists and top leaders to contribute and co-create for a sustainable future within Forestry, Climate and Society – aligned with the UN's 2030 Agenda for Sustainable Development and the future ahead.

BUILD SOLUTIONS FOR THE FUTURE – AND FOR NEXT GENERATIONS

The IUFRO World Congress 2024 is a collaborative global network platform with great opportunity for knowledge sharing and getting access to the latest science and research. The outcome of the event will also set the future research agenda and roadmap for next generations, this time focusing on Forests & Society Towards 2050.

The congress week gives the delegates great opportunity to discuss the important role of our forests. We offer arenas for innovations, forward-looking dialogues, and the foundations for collaborations.

THE WORLD GATHERS IN STOCKHOLM 2024

Meet the collective world expertise on the importance of forests for society, in Stockholm 2024. Take the opportunity to build the future together with global expertise in forestry and climate in connection to the societal development towards 2050.

Leading scientists and top leaders from all over the world
Co-create and find solutions for a sustainable future
Focus on next generations and green employment
A meeting platform for innovation

FORESTS & SOCIETY TOWARDS 2050

By 2050, drastic changes are expected through population growth, climate change, globalization and a growing world economy, thus putting tremendous pressure on forests and their governance. 2050 is a landmark year to achieve the vision of Living in Harmony with Nature of the Convention on Biological Diversity as well as the target of net zero emissions. With a focus on forest contribution to the 2030 Agenda and its sustainable development goals (SDG), the IUFRO World Congress in Stockholm 2024 will help streamlining the forest research agendas, furthering dialogues and cross-sector collaboration, and promoting the multi-functionality of forests and their services.

Key dates

2023 年	
1 月 31 日	Decision advised on Session Proposals
2 月 1 日	Call for abstract submission
6 月 2 日	Deadline for the submission of abstracts
6 月 2 日	Opening of online registration
10 月 30 日	Abstract acceptance decisions

2024 年

1 月 15 日	Early-bird registration deadline
4 月 30 日	Program update
6 月 23-29 日	XXVI IUFRO World Congress

事務局からのお知らせ

1. IUFRO-J 2023 (令和 5) 年機関代表会議のご案内

第 134 回日本森林学会大会がオンライン開催となりましたので、表記会議もオンラインで令和 5 年 3 月 23 日 13:30-14:30 に開催します。代表者会議で取り上げるべき課題等がございましたら、事務局主事齋藤 (iufro-j@ffpri.affrc.go.jp) 宛にご連絡願います。会議の URL などの案内は改めて連絡いたします。当日は、機関代表の方のご出席をよろしくお願い致します。

2. 会費納入・研究者登録のお願い

IUFRO-J の活動は会費収入で運営されております。健全な会の運営のために会費納入をお願い致します。

A, B 会員におかれましては、会費納入と併せて研究者 (会則第 5 条)、連絡員 (付則 1) の登録 (事務局への連絡) をいただいております。また転勤、退職等で機関を離れた皆様には、あらためてご登録いただきますようよろしくお願いいたします。

納入方法

- ① ゆうちょ銀行振込口座への送金 (払込取扱票ご利用の場合)

口座: 00190-3-159224

名義: IUFRO-J 事務局

※払込取扱票をお使いの場合は、手数料は IUFRO-J 事務局の負担となります。

- ② ゆうちょ銀行総合口座への送金 (銀行振込)

店名: 〇六八 (ゼロロクハチ) 店

普通預金口座: 2457242

名義: IUFRO-J 事務局 (ふりがな: ユフロジェイジ ムキョク)

※ IUFRO と J の間には— (ハイフン) が入ります。

3. IUFRO 名称と目的

IUFRO (International Union of Forest Research Organization, 略してユフロ) は、森林関連の研究におけるグローバルな強力を推進すると同時に、ステークホルダーや意思決定者へ科学的知見を発信しています。IUFRO は 1892 年に設立され、オーストリア共和国のウィーンに本部を置く世界的、非営利、非政府、かつ非差別的組織です。IUFRO は、森林および林産研究や関連分野に貢献するすべての個人や組織に開かれています。会員規約及び特典については、下記をご参照ください。

<http://www.iufro.org/membership>

4. IUFRO-J 名称と目的

IUFRO-J は国際森林研究機関連合—日本委員会の略称です。IUFRO 本部の目的に沿って、その事業に協力するため、国内の森林・林産業に関連する研究機関の相互連携を図るとともに、IUFRO 本部に関連する諸活動に貢献することを目的としています。本会の趣旨に賛同する機関・団体または個人が IUFRO-J の会員になることができます。以下リンクをご参照下さい。(森林総合研究所のトップページ右のパナーからも入れます。)

<http://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/iufroj/kaisoku.html>

IUFRO-J NEWS No. 133

January 31, 2023

Copyright © 2022 IUFRO-Japan

Published by IUFRO-Japan

Edited by IUFRO-Japan Secretariat

1 Matsunosato, Tsukuba, Ibaraki 305-8687 JAPAN

TEL: +81-29-829-8327

http://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/iufroj/index_Eng.html

Email: iufro-j@ffpri.affrc.go.jp

ISSN: 2189-5503

IUFRO-J NEWS No. 133

2023 年 1 月 31 日

国際森林研究機関連合日本委員会 (IUFRO-J) 事務局

〒305-8687 茨城県つくば市松の里 1

国立研究開発法人 森林研究・整備機構

森林総合研究所内

TEL 029-829-8327 (国際連携推進室)

<http://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/iufroj/>

Email: iufro-j@ffpri.affrc.go.jp

株式会社ソウブン・ドットコム

[編集・発行]

[印刷]